

## 楓の印刷<sup>1)</sup>

——国立療養所邑久光明園における第二次世界大戦後初期の文芸誌——

阿部 安成

瀬戸内海からみた長島 (2016年2月8日)

**印刷** 国立ハンセン病資料館図書室の開架書架に配架されている、国立療養所邑久光明園（以下療養所名の表記では「国立療養所」を省略）で発行された逐次刊行物『楓』の複写製本合本には、その背表紙に「1948/VOL.2/NO.4-10」と印字された1冊がある。そこには、同誌第2巻第4号（1948年6月10日）、第2巻第5号（1948年7月10日）、第2巻第6号（1948年8月15日）、第2巻第7号（1948年9月5日）、第2巻第8号（1948年10月10日）、第2巻第9号（1948年11月5日）、第2巻第10号（1948年12月10日）の7号分が綴じられている。これらはいずれも謄写版（ガリ版）刷りとなる。

複写製本合本のつぎの1冊は、その背表紙に、「1949/VOL.3 /含む/開園十周年/記

---

<sup>1)</sup> 本稿は2015年度日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究C「20世紀日本の感染症管理と生をめぐる文化研究」(JSPS 科研費 26370788、研究代表者石居人也)、2015年度滋賀大学経済学部学術後援基金研究テーマ「歴史資料の保存と公開と活用の実践論」、2015年度滋賀大学環境総合研究センタープロジェクト「療養所環境を交ぜる」の成果であり、2015年度滋賀大学経済学部ワークショップ ReD [Rethinking excessively for Documentation] の活動の一環でもある。

念号」と印字され、同誌「開園十周年記念号」（1948年12月25日）、「一・二月合併号」（1949年3月1日）、第3巻第2号「三・四月号」（1949年5月1日）、第3巻第3号「五・六月号」（1949年7月1日）、第3巻第4号「癩療養所開設四十周年記念号」（1949年9月1日）、第3巻第5号「九・拾月合併号」「十一・十二月号」（1949年12月20日）の6号分が綴じられている。これらは活版印刷となっている。

ここにとりあげる逐次刊行物『楓』の創刊は1936年のこと、発行所は大阪市西淀川区野里町1133ノ81番地の外島保養院患者慰藉会だった<sup>2)</sup>。同誌は第二次世界大戦戦時下の1944年に、第9巻第7号の発行をもって「暫時休刊」となった。このときの発行所は岡山県邑久郡裳掛村虫明の邑久光明園である。

その後の『楓』は、1947年に手書き手づくりの「廻覧」版がつくられる<sup>3)</sup>。その制作は第1巻第1号に始まり、1948年4月25日発行の第2巻第3号収載の「後記」で、「来月号から謄写版刷に致す予定」と知らされていた。本稿ではこれ以降の『楓』の概要をたどることとする。

この作業をとおして、第二次世界大戦後初期の、癩そしてハンセン病をめぐる国立療養所のような手立ての一斑を整えられるだろうし、また、療養者にとっての「文芸」を知る準備ともなる。

**第2巻第4号** 1948年6月発行号の表紙<sup>おもて</sup>をみよう。「楓」と筆書きされた題字は、そのまえの号のそれとかわらない。巻号数をあらわす数字は「五」とあるのみ。ほかに左から右への横書きで「文芸雑誌」の文字がみえ、表紙絵は菖蒲<sup>あやめ</sup>か杜若<sup>かきつばた</sup>か。文字も挿絵も直の手書きである。後筆か、鉛筆かペンによる「23」の数字はおそらく、発行年のメモ書きだろう。

手書き手づくりの体裁とおなじく扉があり、そこには「高松宮奉迎記念号／楓／第二巻第四号」と縦に手書きで記されている。挿絵は薔薇か。

---

<sup>2)</sup> 阿部安成「復刊のときへーハンセン病をめぐる国立療養所における総合誌と〈戦後〉」滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.242、2015年11月、を参照。

<sup>3)</sup> 阿部安成「楓の手づくりー国立療養所邑久光明園における第二次世界大戦後初期の総合誌」滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.245、2016年2月、を参照。

目次は謄写版刷りとなり——神宮椅堂「高松宮殿下奉迎俳句」、「奉迎短歌及俳句」、於恩賜会館「本田一杉先生特別寄稿」、木下吉雄「芽生之時」、神宮椅堂選「楓俳壇」、飯崎吐詩朗選「楓短歌」、「四月号楓句会より」として「楓詩壇」と、卯之花同人会「開園十周年記念俳句抄」と、山河夢草「随筆（散歩）」があり、ついで、「児童文芸 双葉学園より」、前号から始まった「島の灯」のページには橋美代志「「うれしい」高松宮殿下奉迎して」と、浅野日出夫「卯の花同人会 研究会たより」とがあり、山川記「後記」となる。表紙は「染太郎」、カットは「のぼる」とのこと。前者は手書き手づくり期の『楓』を担った療養者の千島染太郎、後者は同期の終わり近くに寄稿を始めた池部のぼるか。神宮椅堂は園長の神宮良一、木下吉男は職員である<sup>4)</sup>。

山川による「後記」は、記念号となった本号の説明をする——「◆本月は開園十周年記念行事の一として、全国的文芸大募集を致しました関係上、短文芸（俳句短歌）は早くより投稿を戴きましたが、長文芸（諸文章）が皆無で本四月号の編集を憂慮されたのですが、幸ひ諸氏の熱情と努力により、こゝに無事発行の運びとなつたことを、読者諸氏とともに喜びに堪えません。／◆五月三十日<sup>〔教編か〕</sup> = 俳句の巨匠本田一杉先生を我が療園にお迎えし恩賜会館に於て卯の花会と落の芽会春季合同俳句大会を開催致しました事は文芸会の花形俳句を通して両園の親睦を計り、且つ療園文化の向上に資するところ大なるものと信じます。尚一杉先生の御理解に対し深く敬意を捧げます」。

「落の芽会」とは、長島愛生園にある俳句の会で<sup>5)</sup>、「両園の親睦を計り」とは、長島愛生園と邑久光明園との親睦を、ということとなる。おなじ長島にある 2 園の交流の一端がうかがえる。

ついで、印刷について、「◆本号は初めて謄写刷に致しましたが、何分初めての試み故部

4) 邑久光明園入園者自治会『風と海のなか—邑久光明園入園者八十年の歩み』（発行者邑久光明園入園者自治会、発行所日本文教出版、1989年）参照。

5) いま同会についての詳細な情報をもたないが、国立ハンセン病資料館図書室にある『楓』複写製本合本のいくつかには「落之芽会」のスタンプが押してある。また、たとえば長島愛生園で編集発行された逐次刊行物『愛生』では「落之芽会」と記されている例もある（1948年発行の同誌四・五・六合併号掲載の「高松宮殿下奉迎文芸」を参照。同号の発行月日は奥付では4月1日、表紙には7月1日と印刷）。

分品及資材無く困難を極めました、こゝにやうやく発行を了しました、読み難き点及び意に満たぬ処も多々ある事と思ひますが、以上の理由故、只その努力を諒とせられて御高評をお願い致します」と記し、最後は、「◆季節はよし、時代はよし、今や吾が園内にも文芸への関心高まり歩調も揃ひ始め、機関誌『楓』も内実ともに充実されて参りました。吾々の心の糧であり、又よき吾々の伴侶であるこの楓誌を益々盛り育てられん事を切望してやみません」と閉じられた。謄写版刷り最初の号の告知である。

奥付は、「昭和二十三年六月十日印刷／昭和二十三年六月十日発行／非売品／編集兼／発行者／楓編集部／印刷者 楓編集部／発行所 文芸会編集部／楓／第二巻／第四号」。

奥付まえの「後記」のページに30のノンブル。

謄写版刷りの『楓』が動きだした。

**第2巻第5号** 表表紙に、題字「楓」と、左から右への横書きで「6月号」の文字がある号。挿絵はグラスと果実と葉のようにみえる。

扉には、「楓／KAEDE／第二巻／第五号」と、このページで、第二次世界大戦後初のローマ字表記の登場となった。挿絵は、キャンプのようすか、テントのてまえに、倒木に腰かけてノートにペンを走らせるキャンパーのすがたが描かれている。

目次——飯崎吐詩朗「短歌一首 高橋俊一郎選」、瀬田洋「創作 泡」、「短歌 元日集」、「詩五篇」、「楓俳壇 選稻葉医ム課長」、江田島龍二「春季卯の花露の芽合同俳句会記」、松尾進「随筆 玉葱を通して」、「ラヂオ歌壇 其ノ一 其ノ二」、「随想集」として千島染太郎「画布のさゝやき」と浅野日出男「生きる為には」、「児童文芸 作文 俳句」、「島の灯」のページに岡明「長船夜話」、日出男「橋本魚青先生歓迎会報」、きよし「後記」、表紙は染太郎、扉はのぼる、カットはのぼる、きよしのふたり。

短歌の選者高橋俊一郎は、邑久光明園に勤務する医官である（前掲『風と海のなか』）。

きよしによる「後記」——まずは時候のようす、「本年は空梅雨かと、予想されたのであるが、幸ひ慈父の涙の如く降り出した雨は今日もまだ降り続いてゐる。これでどうやら、本園唯一の水田である九反田も田植が始められそうだとこのことで、入園者一同ようやく、しゆびを開いた訳だ。がまだまだ足りない、雨よ、いや宇宙よ、吾々の上に恵みの雨を降

らされよ、と祈りつゝこうした梅雨雲を眺めて詩情の炎を燃やすのも亦趣きがあるものを、と思ひ乍ら、じめじめとした部屋にこもつて原紙を切つてみると。二三寸開いてゐる窓から、湿気をふくんだ、でも爽やかな風が私に御苦労さんと声をかけて呉れる」と。

つぎに、「この楓誌も吾々文芸を志す者にとつては唯一の田であり早苗である。／諸氏よ、吾々の早苗であるこの楓誌を、大方の恵によつてやがて実のりの来たるまで大切に育くまれよ。／編集員一同精力の続く限り努力を捧ぐ」との意気込みが示された。

奥付——「楓 第二巻／第五号／昭和二十三年七月十日発行／発行者 光明園文芸会／編集者 文芸会編集部／印刷責任 山川清志／六月号／非売品」。

奥付のまえ、「あとがき」のそのまえのページに30のノンブル。

**第2巻第6号** 題字「楓」と号数表示が「7月号」との文字で左から右へと横書きで記され、挿絵に水鉢と金魚のシルエットが描かれた号がある。金魚が鉢からはみでているところが、おもしろい。

目次のうえにも挿絵があり、壺の縁にとまる鳥が嘴をそのなかに入れていいる。壺の周囲には骨があるようにみえる。

挿絵のしたに、誌名と巻号表記（第2巻第6号）が左から右へと横書きである。

目次——「橋本魚青先生特別寄稿」、「六月楓句会報」、木下吉男「創作 人間の名に価値せんが為に（第一部）」、高橋俊一郎選「楓歌壇」、長尾もとえ「短歌雑詠」、稲葉俊雄「随筆 偶感」、楓子龍二「近詠」、稲葉楓子選「楓俳壇」、「光明同人抄」、秋田穂月「詩壇 いとなみ」、八木義一「さだめ」、山川草草選「短歌七月集」、「児童文芸 作文／詩謡／俳句」、森八郎「島の灯 園と文化」、日出男記「新緑俳句大会詳報」、清志記「後記」、表紙は染太郎、扉が龍二、のぼるによるカット。

「清記」の「後記」——「○暑さ愈々厳しくなりました。何時も乍ら読者皆様の御後援に感謝致します。編集部に於きましても皆様の御期待に添ふべく敢闘いたしてをります。今月は記念文芸募集のためか短文芸の投稿はありましたが、今月は創作、随筆の投稿がさびしく、木下先生の創作「人間の名に価値せん（第一部）」をお願い致し漸く製本にかゝりました。以上のやうな理由にて今月＝遅刊致しましたことを深くお詫び申し上げます。／尚

製本に当り「＝＝＝謄写インクの不良及び編集中不肖事故の為十日発行の運びが延引いたしましたことを重ねてお詫び申上ます」と時候と原稿情況と遅延、延引の詫びがまずあり、ついで、「○千島染太郎氏独特の表紙絵は五月より執筆していただいてをります。号を追つて芸術味豊かなものとなつてまいりました。御期待下さい。カツトは池部のぼる氏にお願致してをります」とスタッフ紹介。

「○楓誌の印刷については其の方面に交渉中ではありますが、こゝしばらくはどうしても謄写によるの外はありません、皆様も共にこの点に対して御後援下さい」と現状維持が伝えられ、「○内容に対しての御批判、文は編集に対しての新鮮な構造があれば何＝御教示ください。／島の灯＝皆様の建設的な意見の発表の夏ですから奮つて御投稿下さい」と応募の呼びかけ。

奥付——「楓 第二巻 第六号／昭和二十三年八月五日印刷／昭和二十三年八月十五日発行／編集兼／発行者／楓編集部／印刷者 楓編集部同人／発行所 邑久光明園文芸会／岡山県邑久郡裳掛村／虫明六二五三ノ一」。

奥付のまえ、「後記」が始まるページに 32 のノンブル。

**第 2 巻第 7 号** 表紙絵がこれまでになく斬新と読者の眼に映ったことだろう。水着の女性のシルエット、彼女の髪はなびき、波？飛沫<sup>しぶき</sup>の跡も鮮やかだ。「楓」の題字と号数の「8」も簡潔にして、挿絵を際立たせている号がある。

扉は、「楓／KAEDE／第貳巻第七号」の文字と、四阿に松の挿絵。目次のうえには、「8 楓月／夏季文芸特輯号」と左から右への横書きで、誌名、号数、特集が記されている。

目次——「夏季文芸入選作品」は、まず「詩 岡田誠太郎選」「創作 木下吉男選 瀬田洋」「俳句 神宮椅堂選」「短歌 高橋俊一郎選」で、選者はすべて園側のひととなっている。岡田も医官（前掲『風と海のなか』）。ついで「少年之部」では、「作文 編集部選」「詩謡 編集部選」「俳句 編集部選」といずれも編集部が選考を担っている。これも『楓』が「職員患者の総合雑誌」（第 2 巻第 3 号「後記」1948 年 4 月）であるがゆえのことか。

つづく稿は、「梶井枯骨先生寄稿」、「楓俳壇 稲葉楓子選」、「梶井枯骨先生歓迎句 卯之花同人会」、「楓歌壇 長尾もとゑ選」、「短歌八月集 高橋俊一郎選」、「島の灯／生ける神を拝

す 木下吉男選 大立ひろし)、きよし「あとがき」、表紙染太郎、トビラ龍二、カットきよし。

「きよし記」の「あとがき」——「残暑なほ厳しきニとは云へ落る一葉にも、秋の足音を忍ばせて参りました。この絶好のシーズンに、園内の皆様、並に友園の皆様、益々御健闘の事と御慶祝申し上げます」とあるので、この謄写版刷りの『楓』はほかの療養所にも送付されていたのだろう。

つぎに、「我々光明園文芸会も、近代的思想の風潮によつて、より高き文化的組織の創造が必要となつて来た。／と共に、我々は、趣味的文学より超脱し、療養所即、文化のサンプルとして、自然社会にデビューすべく努力せなければならない／外的には、さきに高松宮殿下を迎へ奉り。／内的には、プロミンの効果偉大なりと聞く。／内外共に急ピツチに吾々の存在を認められんとする時、吾々は籠の鳥、ならぬ。島の人として満足してゐて然るべきだらうか。／私は惟ふ、島の間人なるが故に、より一層、人間の価値存在を意識する、そうすることが社会に対する吾々に与へられた、義務の遂行だらう、と」。

癩、ハンセン病が治る病になりつつあるとき、『楓』はなにを、どう発信してゆくか。

奥付——「楓 第二巻／第七号／昭和二十三年九月五日印刷／昭和二十三年九月五日発行／発行者 光明園文芸会／編集者 楓編集部／印刷責任 山川清志／邑久光明園文芸会／岡山県邑久郡裳掛村／虫明六二五三ノ一」。

奥付のまえ、「あとがき」が始まるページに 35 のノンブル。

**第 2 巻第 8 号** 表紙絵は、読書の秋 (本)、名月と月見 (満月)、そして紅葉 (公孫樹) をあらわしてどうか。題字「楓」、号数表記「9」の号。

扉に描かれた果実と葉は収穫の秋というところか。文字は横に「楓／KAEDE／NO2 NO8」、縦に「九月号」、したには、「故飯崎吐詩朗氏追悼号」とある。横書きはみな左から右へ。

目次——「飯崎吐詩朗氏追悼欄」、医ム課長稲葉俊夫「飯崎吐詩朗氏を偲ぶ」、瀬田ひろし「生きる日の限り (飯崎さんを憶ふ)」、「遺稿抄」、「追悼文芸入選作品」として「詩謡 岡田誠太郎選」「短歌 高橋俊一郎選」「俳句 稲葉楓子選」「追悼短歌 永井静夫選」、山川きよ

し「創作 今日を失はず（夏季文芸入選作品）木下吉男選」、「楓短歌 高橋俊一郎選」、「楓俳句 稲葉楓子選」、「観月句会報」、山川夢草「随想 自然と人間」、岡明「島の灯／青年と文化 木下吉男選」、きよし「あとがき」、表紙は染太郎、カットきよし。

この号で追悼される飯崎は、かつての『楓』の手書き手づくりを担ったひとりだった。

きよしによる「あとがき」もまず、「今月号は遅れはせ乍らも、故飯崎吐詩朗氏の追悼号として、皆様のお手元にお送りする事が出来ました。さゝやか乍らも本誌が、星空の彼方に旅立ちし故人にいさゝかの餞ともなれば私達の幸ひこれに過ぐるものはありません。故人は皆様御承知の様に短歌に秀で亦吾が文芸会の生みの親として、献身的な努力を尽し下れた人であります。こゝに僅少乍ら遺稿を掲載致しました。遺稿は「やすらひ」以後の作品集より抜粋したものであります。何卒皆様御多評下さいます様お願い致します」と故人をおくった。

つぎは他園とのこと——「先般十月三、四日二日間に互り愛生園に於て、青松、光明、内海三療養所の政治的協議会に並行して、文芸懇談会を開催下され、私達もその末席を汚す事の光栄に浴したのであります。当日の中心議題は、三園季刊合同文芸雑誌発行の件、その他療養所文芸の歩み方等々、各園の特質に基き意見の交換が行はれ、真に有意義な懇談会風景を醸した事は、療園文化に寄与する所大きく且亦療園文芸の将来に革命的行事であつたと確心致します。こうした懇談会が三園のみに止どまらず、全国療養文芸団体が一場に会したきものと思ふものゝ前途なほ多難なるでせう。而し近き将来に斯くある事を念願しつつ、本誌主催の元に誌上懇談会を企画致して居ります、その砌には、活潑なる御意見と隔意なき御批判をお寄せ下さいます様お願い致します」。

ひとまず、いまの時点でわたしは、このあと三園でこういった協議がおこなわれたのかを確認していない。瀬戸内 3 園（長島愛生園、邑久光明園、大島青松園）はなにかと合同の企画をおこなってきたことがわかっている。ただ、「三園季刊合同文芸雑誌」が現在この 3 園や国立ハンセン病資料館に残っていないところからすると、この企画はどこかで頓挫してしまっただろう。とはいえこうした企画があったとわかったことは重要である。

もう 1 つ——「曩に募集致しました。開園十週年記念文芸募集入選作品発表が意外に遅

れ応募下さった友園に対し真に申訳なく思つて居ります。先日敬愛園より御送附下さいました寄書きの返信の全文を掲載して全国応募者の皆様に御了承をお願い致します」という。詳細は不明ながらも、邑久光明園と星塚敬愛園とのあいだで、記念文芸募集をめぐってなにか悶着があったのだろう。よしあしはともかくも、園のあいだでの交流が確かにあったこととなる。そうした場として、媒体として、『楓』があったのだ。

奥付——「楓 第二巻 第八号／昭和二十三年十月十日印刷／昭和二十三年十月十日発行／発行者 光明園文芸会／編集者 楓編集部同人／印刷責任 山川清志／光明園文芸会／岡山県邑久郡裳掛村虫明／六二五三ノ一／非売品」。

奥付と「あとがき」のうしろおよそ 1/5 が載るページに 40 のノンブル。追悼号ゆえに厚くなつたか。

**第2巻第9号** 表紙絵にポットとカップ、「楓」「10」と記された文字がある号。

扉は、薔薇の挿絵がやわらかく、「楓／第二巻第九号／十月号」の文字は直線性が強い。横書きの文字はすべて左から右へ。

この号には扉も目次もない。

きよしによる「あとがき」——「新しい感覚は如何なる時代の文芸作品にも必要だが、殊にルネッサンス革命の現今に於てはより一層新鮮なものを要求する。最近の大衆雑誌では、旧作品をそのまま、新作の如く掲載されてゐるのを見受ける、== 尖端をなす文化事業が斯かる現状では、文化革命も真に心細い限りである。而し幸ひにも吾々療養所に於ける文化雑誌は、新しい感覚と新しい思想によつて、逐次文芸全般の向上を目差しつゝある事は真に喜ばしい事実である。私達、楓誌に於ても「光明園文化の温床、であり、根源である。」とまで向上、発展させたいものである。／各位の限りなき努力を切に要望してやみません」。

奥付——「楓 第二巻第九号／昭和二十三年十一月五日発行／昭和二十三年十一月五日印刷／発行者 光明園文芸会／編集者 文芸会編集部／印刷責任 山川清／光明園文芸会 在所／岡山県邑久郡裳掛村虫明六二五三ノ一」。

奥付と「あとがき」があるそのまえのページに 34 のノンブル。

**第2巻第10号** 大きな皿、ひとふたりのシルエット、ひとりはずっと腕を伸ばして指さしている。文字は「楓」と「12」のみの表紙の号。

扉の挿絵は、山、小川、林、文字は「KAE 楓 DE／第二巻第十号／十一 十二月号」で、題字のみが左から右への横書き、それ以外は右から左へと旧来の書き方を用いている。

この号にも目次がない。

きよしの署名がある「末巻の辞」——「楓 第二巻は本号を以つて終了致します。過去一年間を顧みまする皆様の精進によりまして遅々たる歩み乍らも、肉筆の発行から、プリントへと、そして新年度からは印刷による発行が可能となりました。／こうして先づは都の完成を見たのでありますが、今後に於ける質的向上は、一層皆様方の双肩にかゝるのであります。而し乍ら、私達文芸会の現状を見まするに、未だ嬰兒の域を脱せず、幼児の歩みにも似た感があるのであります。／この現状を打破しやうとするには多大なる困難を、より多き障害のある事を覚悟せねばなりません。／ではこの困難、この障害を如何にして克服すべきか、只だ努力のみと存じます。／私達が確実な努力の足跡を残して歩む時、必ずや、その〔判読不能——引用者による。以下同〕には、私達の世界、文芸の〔判読不能〕私達の魂の故郷が拓けるものと確心致します。／私達は、あくまでも、ジャーナニスト的な態度を捨て、どこまでも文芸の為の生活、即ちこの一日一日の生活を、神は文芸の為に私達に与へて下さるのだ。と云ふ潜入観を以つて進むべきだらう。と思ひます。／私達の心の世界、魂の世界は自由であります。如何なる未知の土地をも踏破する事が出来、亦如何なる歓喜をも == 得るのであります。／こうした限られた自然の中に生を営む私達にとって、文芸こそ絶対のものであります、自己の心の眠りを覚まし、曇りをはらつて呉れる文芸に一層の精進を重ね、その唯一の発表機関である楓誌を、刻、一刻、発展向上に努められん事を切望致します」と、結ばれた。

これまでとは「きよし」の手が異なる。

奥付——「楓第二巻第十号／昭和二十三年十二月十日印刷／昭和二十三年十二月十日発行／発行者 光明園文芸会／編集者 文芸会編集部／印刷 山川清／十一、十二月号／非売品」。奥付の文字も直線性が強い。

そのまえの「末巻の辞」のまえのページノブルが44。厚い。

**記念号** 「開園十周年記念号」の文字が左から右へと横書きで活版印刷されている号の表紙絵は楓の枝と葉で（裏表紙につづく）、題字の「楓」がこれまでの号とおなじ筆の書体となっている表紙の号がある。そこにはまた、おそらく鉛筆による手書き文字「24年」がみえるが、この号の発行はその年ではない。

目次には、その冒頭に『『楓』開園十周年記念号』の文字が印刷されている。第二次世界大戦後に手書き手づくりで始まった『楓』の制作は、この号においてようやく活版印刷となった。

目次——「口絵」に「光明園八景の内木尾の入江 光明園全景／礼拝堂における開園十周年記念式典 恩賜会館前での当日来賓記念撮影」（これら4葉の写真についてのキャプションは順に「光明園八景の内木尾の入江」「光明園全景俯瞰図」「礼拝堂に於ける開園十周年記念式典」「当日来賓記念撮影」）、園長神宮良一「開園十周年記念号発刊を祝す」、総代松本杉雄「開園十周年記念号に寄せて」、そして「開園十周年記念号応募文芸入選作品集」として他園の在園者もふくめた投稿入選作があげられ、木下吉雄「十周年記念文芸応募作品編輯に当って」、「職員寄稿欄」、園長神宮良一「開園十周年を顧みて」、医務課長稲葉俊雄「光明園十周年回顧」、職員稲葉定七「開園十周年を祝して」、職員木下吉雄「所謂療養所文芸の在り方について」、「入園者寄稿」、阿部礼治「十年を回顧して将来を思ふ」、大仏正人「十周年記念式に臨みて」、木下吉雄「編輯後記」。

木下の「編輯後記」はまず、「吾等の園は開園十周年を」「桜が、やがて葉桜に移らうとする時」に祝ったのだが、「その記念号は、木枯の木梢にうそぶく師走も末となつてやつと諸兄姉の許に御目見得するやうに遅れてしまった」と示した。その理由はというと、「編輯子の不憚れと、本務の繁忙、種々の障碍はあつたとしても、怠漫荏苒日を送つて今に至つたことは私独りの罪として充分責められていゝ」と詫びるのだから、この記念号は、園の職員である木下の編集によってまとめられたこととなる。

編集を担った木下は、惜しまれたところを2点あげた。1つが、「本号の応募作品の中で殊に淋しく思つたのは論文篇であつた」という——「篇数も五指を屈する程もなかつたし、

内容も他のものに比して大部見劣りがした。入園者の日常生活や生理状態を考へる時、これは他の投稿が相当のレベルに達してゐる以上、望蜀の望みでもあらうが、この種のものには療養所の中堅ともなるべき青年層こそ大いに活躍すべきである、今後の全国の病友中、殊に若い世代の人々に私は建設的、自覚的世界への歩み出しを望むこと大である」と情況を示したうえで、今後を展望した。もう1つが、「応募作品は一、二を除き殆ど全国の療養所より寄せられたが、量に於て非常にむらがあつたのが心残りである」とみせた。

ついで『楓』誌については、「この記念号は続いて復刊される園誌「楓」の皮切りをなすものであり、年を改めていよいよ一、二月合併号として本号を手にされた方々の御手許に届くこととなるであらう」と喜びをあらわした。

ついで謝辞、「本号を編輯するに当り、骨の折れる地味な下受けの仕事を進んでされた当園入園者山川清志氏外文芸会の方々、千島染太郎教養部長、及び職員にして何くれと御手伝ひ、御指導頂いた方々に厚く御礼申上げる」とのこと。木下ひとりの作業でこの記念号ができあがったわけではなかったのだ。謝辞は印刷会社にもあてられ、「救癩運動の一端ともなればとの御気持から殆ど利潤を度外視して本号の印刷を快く引受けられ、短時日をこれ一本にかかつて下さった日笠印刷成宏株式会社の方々に深い感謝を捧げたい」。

奥付——「昭和二十三年十二月二十日印刷納本／昭和二十三年十二月二十五日発行／岡山県邑久郡裳掛村虫明／編輯者 松本杉夫／木下吉雄／発行者 神宮良一／岡山県上道郡西大寺町二一九番地／印刷人 日笠伝二／岡山県上道郡西大寺町二一九番地／印刷所 日笠印刷成宏株式会社／西大寺工場／電話／五三／一五三／番／岡山県邑久郡裳掛村虫明／発行所 邑久光明園／電話 虫明 二七番」。

これでは記念号はまるっきり、いわゆる園側の刊行物である。

奥付まえのまえのページ（「編輯後記」が終わるページ）についたノンブルは166。記念号はさすがに分厚い。

**「復刊」号** 題字と挿絵がある表紙がさきの記念号とおなじ1冊、ただし号数表記は左から右への横書きで「一・二月合併号」と活版による印刷。

目次——園長神宮良一「復刊の辞」、職員木下吉雄「復刊の辞」、文化部長千島染太郎「梅

よりも清く」、「短歌 高橋俊一郎選」、「俳句 稲葉楓子選」、「詩 岡田誠太郎選」、原よし志「楓詩の復刊を慶ぶ」、「新役員展望（其の一）」に人事部長岩田武、会計部長柳瀬信次、物品部長瀬川秀雄、評議員梶豊子、評議員大西明、池部のぼる「創作 ほろびゆけど」、「新役員展望（其の二）」に病室主任中山秋夫、総寮長日比太一郎、寮長遠藤武夫、寮長勝野清、寮長上丸武夫、寮長小林義雄、「楓歌壇 長尾もとし選」、「楓俳壇 稲葉楓子選」、遠藤武夫「随想 追憶」、松尾進「随筆 淋しさ」、山川清「随感 沈丁花」、木下吉雄「編輯を終へて」。

木下の「編輯を終へて」は、「例年になく暖かい冬で桜もちらほら咲き初めようとする此頃、復刊号としての本誌が御手許に届くこととなつた」とこれまた歓喜をあらわし、他方で、「本号に職員の投稿が殆どないことも、この点よりして甚だ心淋しきものであつた。入園者側よりは丁度園内役員の改選に当つて新役員の寄稿が寄せられ、そのすべてが園内に真の愛の充実し滲透せんを筆を揃へて希求してゐる」と示していた。巻末には「新役員一覧」も載る。役員は園側のひとではなく療養者だった。依然として『楓』が「職員患者の総合雑誌」（第2巻第3号「後記」1948年4月）であるということか。

さて、冒頭の園長の辞にしても、巻末のいわゆる編集後記においても、この号が「復刊」ととらえられているのである。まさに文字どおり「刊」の語が用いられたのであって、謄写版刷りもましてや手書き手づくりの号は、戦時中に途絶えた『楓』の復とはみなされなかったのだ。つぎの号は第3巻第2号とかぞえられることとなる。すると1949年の発行号が第3巻で、その前年1948年に手書き手づくりと謄写版で刷られた号が第2巻、1947年の手書き手づくりの号が第1巻となり、「復刊」されたという活版印刷の『楓』は巻号数で手づくりのときからのそれを継いでいたのだった。

奥付——「昭和二十四年二月二十六日印刷／昭和二十四年三月一日発行／編集兼／発行人／神宮良一／印刷人／岡山県上道郡西大寺町／日笠伝二／印刷所／岡山県上道郡西大寺町／日笠印刷成宏株式会社／発行所／邑久郡裳掛村虫明／邑久光明園」。

奥付のまえのページのノンブルが48。